

特集

皆さんの声が届く西尾市を目指して 中村市長の新市政が始まる

6月25日に行われた西尾市長選挙で当選した中村健氏が、7月5日、市長に就任しました。17万人市民の若きリーダーは、皆さんの期待を受けて、これから4年間西尾市を牽引していきます。7月14日の市議会7月臨時会では「『チーム西尾市』で、未来に夢や希望の持てる、ワクワクする西尾市をつくっていききたい」と所信表明を述べ、新たな市政がスタートしました。

思いを込めた所信表明(要約)

市民が主役のまちづくり

市政の主役は、市民一人一人です。皆さんの生の声に耳を傾け、反映させることが、私の使命です。実際にお聴きした中で一番多かった声は、市民との距離が近く感じられる市役所にしてほしいというものでした。

まずは積極的に情報を公開し、行政の透明性を確保します。市民討論会の開催や予算編成過程の公開で、市民の皆さんが事業提案や率直な意見を述べられる仕組みを整え、市民と同じ目線で考え、市民の声が届く市政を実現します。

これからの時代、行政が主体となる手法では、市民満足度の高いまちづくりはできません。子どもの見守り活動、地震や火災などへの対応な

どを有効に機能させるためには、地域の実情を踏まえ、その地域の住民の協力を得ることが不可欠です。核家族化や地域のつながりの希薄化、地域コミュニティの力が低下しているからこそ、地域コミュニティを活性化する活動を積極的に支援します。

人口減少への対応

現在の日本が抱える問題の一つは、人口減少です。西尾市も例外ではなく、少子高齢化による人口減少は、「税収の落ち込み」「労働力人口の減少」による企業の生産力の低下「現役世代の税や社会保障の負担の増大」など、深刻な影響を与えます。

人口減少に歯止めを掛け、「住みたまち」を実現するには、子育て世

「チーム西尾市」で つくる未来



所信表明を述べる中村市長

代を支援し、定住促進を図り、生産年齢人口を維持することが重要です。不妊治療費の助成拡充や、病児保育・病後児保育の充実、包括的で切れ目のない子育て・教育環境の整備により、「子育てをするなら、西尾市」と思ってもらえるまちづくりを進めます。

西尾市は合併で面積が広がったものの、公共交通が不便な地域が残っています。交通弱者や地域格差を生まないために、くるりんバスやデマンド型乗合タクシー「いこまいか

ー」、路線バスなどの特性を研究し、公共交通体系を再編します。

産業競争力の強化、安定した雇用による「働くことのできるまち」の実現も必要です。農業・漁業・水産業・畜産業のブランド力の向上、6次産業化、工業団地の開発などの企業誘致を推進します。「ものづくりのまち西尾」の知名度を向上させるための企業の支援や、商店街の活性化、若者の起業支援などに取り組みます。

観光にも力を入れ、「訪れたいま



中村健 (なかむら・けん)

高落町在住。昭和54年4月生まれの38歳。西尾市立三和小学校・東部中学校卒業後、県立岡崎高校を経て大阪大学法学部へ進学。平成17年、西尾市役所に入庁。平成25年、西尾市議会議員初当選。家族は妻と1男

「ち」を実現させます。西尾市には「西尾の抹茶」や「一色産うなぎ」に代表される特産品、温泉、歴史と名所旧跡、豊富な自然など、多くの観光資源があります。市観光協会を中心に、観光資源を魅力的なものに磨き上げるとともに、プロモーション活動にも力を入れ、県内随一の観光地を目指します。

ビジネスホテルやコンベンション

ホールの誘致で、駅前のにぎわい創出が進みますが、中心市街地にさらに人が集まる仕組みや仕掛けも考えていきます。

行財政改革

国の財政がひっ迫し、地方交付税の減少も想定される中、今年度から、西尾市は合併算定替えによる普通交

付税の縮減が段階的に実施され、5年後には20数億円もの歳入減が見込まれています。今のままでは、数年後には予算が組めなくなるかもしれないという危機感を持っています。だからこそ、一刻も早い徹底した行財政改革が必要です。西尾市を「前例にとらわれない、積極的に新しいことに挑戦する、改革を恐れない」組織にしなければなりません。

まず、事務事業では「あれもこれも」ではなく、「あれかこれか」への転換が求められます。事業の棚卸し・見直しを図る中で、市民参加の仕組みを取り入れ、事業の必要性、コスト、効果を見極めて優先順位を付け、事業を執行します。

次に、歳入確保のため、企業誘致の強化、ふるさと納税事業や広告収入事業など税外収入の確保、公有財産の有効活用、市税収納率の向上にも取り組みます。一連の改革を断行していく中では、市民の皆さんに我慢していただくこともあるかもしれませんが、未来へ持続可能な西尾市をつくるために、逃げずに正面から取り組んでいく覚悟です。

最後は、公共施設再配置第1次プロジェクト（西尾市方式のPFI事業）の見直しと、産業廃棄物最終処分場の建設反対です。

西尾市方式のPFI事業には、多くの議員や市民から、不安や反対の声がありました。公共施設の再編や統廃合、PFIという手法そのものを否定しませんが、西尾市方式のP

F I事業は、いったん凍結し、市民の声を聴き、全面的に見直します。一色町の生田地区に計画されている新たな産業廃棄物最終処分場の建設は、漁業への影響や震災時の液状化が懸念され、これまでも一貫して反対してきました。今後も地元の方と対話を続け、建設中止に向けて県や国へ積極的に要望を続けます。

市政の棚卸しによる、徹底した行財政改革を断行することで財源を捻出し、ハコモノに依存するのではなく、ハードよりもソフトを重視し、未来にツケを回さない責任ある政治を心掛けていきます。

おわりに

幡豆郡3町との合併後6年が経過したものの、一つのまちとして一体感を作り出していくには道半ばの状況の中、政治経験が豊富とはいえない38歳の私が、市長に選ばれました。政治の世界に漂う閉塞感を打ち破ってほしいという期待の表れであり、光栄に思うとともに、全身全霊で市政発展に取り組む所存です。

しかし、私一人や行政組織だけの努力では十分ではありません。全ての市民の皆さんや、市内の各種団体の皆さんにも、ぜひ知恵と力を貸していただきたいと思えます。住民・企業・議会・行政が一体となった「チーム西尾市」で、未来に夢や希望の持てる、ワクワクする西尾市をつくっていききたいと考えています。



写真で見る 中村市長の就任

7月5日に、多くの職員が見守る中、中村市長が初登庁しました。当選証書付与式や就任初日の様子、就任後に多くの公務を行う市長の姿などを写真でお伝えします。



選挙翌日の6月26日、市役所で行われた当選証書付与式で、市選挙管理委員会の羽佐田芳和委員長から当選証書が付与されました。緊張の面持ちで式に出席した中村市長でしたが、当選証書を受け取る際には、笑顔を見ることができました(写真2)。

市長としての初登庁は、7月5日。午前8時20分、市役所正面玄関に到着すると、待ち受けた市職員に迎えられ、女性職員から花束が送られました(写真1)。

多くの職員からの拍手に笑顔で答え、3階の市長室へ(写真3)。市長室では背広の襟に、市長バッジを付けてもらうと、責任感に満ちた表情を見せていました(写真5)。

9時からは、市長就任式が行われました。出席した約200人の職員を前に「17万市民の生命と財産を守る使命と責任の重さに、身が引き締まる思い。現在の西尾市が置かれて



5



6



7



3



4

いる状況を見ると、多くの難題が横たわっているが、市長として、まず皆さんに伝えたいことは、思いを一つにして、ONE西尾、市民も一体となった「チーム西尾市」をつくっていききたいということ。『思い』というのは、言うまでもなく、市民の福祉向上のため、市の発展のためということであり、タイムリーな言い方をすれば、市民ファーストを心掛けてほしい。私も市長として市政運営に全身全霊を注ぎ、誠心誠意取り組む」とあいさつ。職員に対しては「物事を決め付けないでほしい」「伝えるよりも『伝わる』ことを意識してほしい」「自分の意見をしっかりと持ってほしい」という3つの願いを挙げていました。その後、副市長から送られた歓迎の言葉に、真摯に耳を傾けていました(写真4)。

11時から行われた記者会見では、市長就任にあたっての心境について記者から尋ねられると、「就任前日の昨日と今日では責任の重さが違う。やれることを全力でやる。前向きな姿勢で仕事に臨んでいきたい」と真剣な表情で答えました(写真6)。

7月14日に、市議会7月臨時会に出席して所信証明を演説。今後の市政運営に対する決意を力強く述べました(2ページ右下の写真)。

臨時会后、和やかな雰囲気の中で市議会の正副議長にあいさつをしました。より良い西尾市を目指し、共に協力していくことを話し合っていました(写真7)。